

産業デザイン教育の先駆・金沢区工業学校

— 金沢美大誕生前史 —

黒川 威人

はじめに

金沢は明治20年、区方工業学校を設立したことで日本の産業デザイン教育発祥地となった。創立者納富介次郎は、肥前の皇学家柴田花守の次男に生まれ、16歳のとき佐賀藩士、納富家の養子となった。若いころから維新の志士、江藤新平、後藤象二郎、副島種臣らと交わり、明治政府樹立後は政府の政策に協力、ウイーン博やフィラデルフィア博に派遣された人物である。もと画家を志していたが、志士らと交わるうち、やがて国を富ますための殖産興業政策の重要性に気付き、その一環として、伝統工芸の近代化を中心とする独自の産業技術者教育理論を打ち立て、実践することを生涯の仕事とするに至る。

産業デザイン教育校としては金沢工業学校に次いで、富山県工芸学校、香川県工芸学校、さらには佐賀県にも有田工業学校を創設しており、それぞれの地域の振興に大きな功績を残した。

これらの学校で介次郎が目標としたのは、デザインのできる職工の養成であり、それぞれの地域の伝統技術を生かした製品作りであり、ひいては我が国の殖産興業であったが、自らも多数の製品のデザインを試みており、今日のインダストリアル・デザイナーのはしりでもあった。

なお、金沢においては工業学校の設立に先立って蓮池会・絵画研究会が画学校を作るための運動をおこしていたことを特記しておかねばならない。この画学校案と納富の案が折衷されて工業学校が設立されるに至ったとも言えるからである。

ここでは、金沢を中心に、明治から始まったデザイン教育の系譜が、どのように地域社会とかわり、今日の金沢のデザイン教育へと連なっているのかを見てみたい。

明治の殖産興業

金沢では、前田藩政の初期、戦乱の世が安定した3代利常のころから、都より当代一流の工芸家を集めて祿を与え工芸制作・指導に当たらせるなどした。これが今日の工芸石川の基礎になっていると地元では信じられ定説となっている。納富が



金沢工業学校長時代の納富介次郎(参考文献2より)

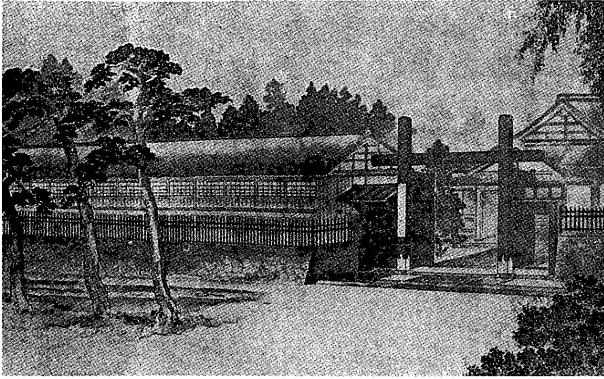
こうした故事を知っていたかどうかは別にして、工業学校の創設に先立つ明治15年と19年に県の要請で九谷焼や銅器の指導に来県しており、この地域が持っている発展の可能性を、美術工芸の近代化をおいてほかにはないと考えたのであろう。

当時、高級な美術工芸の大半は武士階級を顧客としていたため、明治の廃藩とともに保護者をなくして衰えてしまっていた。これを活かすには近代的な工業技術を教え、生産性と品質を高めるとともに、デザインにより製品の魅力をアップさせねばならないと考えたに違いない。それは海外での体験に裏付けされたグローバルな視点からの発想であった。

こうして金沢工業学校へは当代一流の美術家・工芸家・学者達が招かれることになっていくのである。

納富は金沢の伝統美術工芸を世界に通用するデザインとして再構築し、科学的な方式に基づく生産を起して産業としての育成をはかろうとしたのであった。

なおさかのぼる15年来県の折りは「銅器製造者同盟規約」を締結させており、これは国の意匠条例



創立当時の金沢工業学校(旧金沢学校建物)
正面(参考文献14より)

(明治21年)に先立つものとして高く評価されるがここでは触れない。

金沢区方工業学校

ここで工業学校の規則を概観しておこう。

第1章「総則」第1条では、「本校ハ各種ノ工芸ニ関スル学理ノ応用法ト芸術トヲ兼授ク」、とあり工学と芸術とのドッキングをうたっている。納富は図案の語の訳出者として知られるが、ここでは使われていない。しかし意図するところは今日いうところの芸術工学であり、明らかにデザインであると思われる。

第2条では、第1項で、専門画学部、美術工芸部、普通工芸部の三大部をおき、各部を部学と分学とにわけ、さらに部学分学とも科を大修、小修に区別するとしている。

この部学分学、大修小修に対応する概念を今日の学校教育に見い出すのは困難だが、そのねらいとするところは、2項から5項にかけて説明されている。即ち、部学大修を修学するものは「画学師、美術工芸師、普通工芸師等の一大専門家たる資格」を、部学小修は「同上部門の一小専門家たる資格」を、それぞれ得させようとするものであり、分学大修は「一品種の製造に限って一個人で成就する独立工人資格」を、分学小修は「被雇者又は同盟分業等をなす上等工人資格」を各目的とするものであった。複雑なようだが当時の生徒のさまざまな事情に合わせよ

うと苦心したものであろう。

第2章「学期」において修業年限を仮定している。もっとも長いのが部学大修の5年以下3年以上、最も短いのが分学小修の1年半以下6ヶ月以上である。但し次の第5条で「毎学期ノ長短ハ業ノ難易ト成不成トニ依リテ伸縮ス」ることになっているので実際にはかなり自由に設定されていたかも知れない。

第3章「入学」において年齢等を規定しているが、入学年齢は部学大修小修で男満十四、女十三歳以上二五歳以下、分学大修小修は下限は同じで三十歳以下と共にかんがりの高齢である。産地技術者の再教育をもねらっていたのは明らかである。

なお男女共学であったことは特筆に値する。これは当時小学校を修了した女子に進学すべき適当な上級学校がなかったことから、地域において貴重な労働力であった女子に職業教育を授けることの重要性を考えたためであろう。

「授業料」を規定した第4章の後、第5章に「学科」が示されている。「当分の内左の芸術を教授す但し入学の生徒並びに授業上の都合により増減することあるべし」、とあって「専門画学部」は本邦歴史科、支那歴史科、古体風俗科、肖像科、写真動物科、写真植物科、写真山水科、写意人物科、写意動物科、写意山水科、写意植物科、紋章科の12科、「美術工芸部」は描金科、陶画科、金属彫刻科、木石牙彫刻科、蠟粘土模型科、繡物科、染画科の7科、「普通工芸部」は色染科、裁縫科、機織科、髹漆科、鑄銅科、紙質製品科、海産製造科、陶磁製造科の8科で合計27科が用意された。

しかし入学生徒と授業上の都合により実際に開講されたのは下記16科のみであった。

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 専門画学部 | 本邦歴史科、写真植物科、写真動物科、写真山水科、写意人物科 |
| 美術工芸部 | 陶画科、木石牙彫刻科、蠟粘土膜型科、繡物科、染画科 |
| 普通工芸部 | 色染科、裁縫科、髹漆科、鑄銅科、海産製造科、陶磁製造科 |

さらに翌年の11月には美術工芸部の蠟粘土模型科、木石牙彫刻科が廃され代わりに彫刻科が加えられて

いる。同時に普通工芸部では鋳銅、海産製造、陶磁製造の三科が廃されている。海産製造科は納富がかねて「石川県は海岸線が長いのでこれを活かすべきだ」との意の持論(注1)をとなえていたことから設置されたものだが、いかんせん指導できる人材がいなかったのであろう。逆に鋳銅、陶磁製造の2科は地元で産業として十分に発達しており、今さら工業学校で修業を希望する者はいなかったということであろうか。開校時のこれらの学科の生徒数を見ると、海産製造科の10名に対し鋳銅、陶磁製造とも1名（共に研究生を含む）とあってこれを裏書している。

以上の結果、21年の11月以降残ったのは結局12学科であった。なお23年4月にはこれに描金科が加わったが、同7月には裁縫科が廃止となり、27年の改組まで12学科体制が続いたとみられる。ただし、明治21年から29年の在学生徒数科別表によると専門画学部の5科はひと括りにして表示しており、また教科課程表（カリキュラム）上の区別はなく、今日のように明確な学科分けではなかったと思われる。

第6章の「雑則」中には先に述べた男女共学を規定している第13条と共に、次の第14条も目を引く「入学試験合格ノ者ハ何業ニテモ本人ノ望ニ任スヘシト雖モ最初入学ヨリ三週間乃至五週間其学芸ヲ教授シ若シ不適當ナル者ト認ムルトキハ之ヲ論シテ他ノ業ニ就カシムコトアルヘシ」即ち、入学試験をパスした者といえども3～5週間教育を受けさせて適性を判断し、不適な者には他の道を選ぶよう説得するというもので、美術あるいはモノ造りには適性ないし才能が大きく左右することを認めていることである。今日の大学教育といえども、適性を見抜くのに苦労していることと通じて興味深い。ただし卒業生名簿（大正5年の同校校友会誌）によれば明治22年9月の卒業生はわずか3名に過ぎない。同20年7月の開校時には137名（男子80、女子57）もの生徒を数えたにしては、いかに速成科（分学小修）のみの卒業といっても少なすぎる。翌23年の6月卒業の時点ではやや増えて12名、以降24年は7名、25年は13名、26年は15名と漸増、しかし27年9名、28年10名、29年10名、30年8名とふるわず、ようやくコンスタントに

20名以上を数えるようになるのは37年以降である。いかに当時学業を全うすることが困難であったか、（これは必ずしも学業不適當ばかりではなく、生徒の経済的理由や教員スタッフと施設設備の不足にもよる）を物語っている。この様な状況では、県議会において工業学校廃止論が少なくなかったことも、無理からぬことであつたと思われるのである。

最後に附則が5章に渡って定められており、これがいかに納富らしい配慮を見せていて興味深い。

附則の第1章では「製品試験及図画委嘱」を規定し、学外からの様々な求めに応えるべく定めているのだが、その第4項で「美術画ノ揮豪又ハ図案等ヲ委嘱スル者ニハ相当ノ謝金ヲ納メシメソノ望ミニ応スヘシ」と、ここで初めて「図案」の語を用いて、そうした依頼には積極的に応ずる姿勢を見せている。

第2章では「研究生および傍観傍聴人」として選科生や研究生の規定と共に一般人の聴講が自由にできると規定している。また第3章「改良発明」では、製品の改良や新発明をなしたものは校長より現品に報告書をそえて区長へ届け出ることを規定しているのが目を引く。国の意匠条例に先駆けて産地の同盟規約を結ばせ、創作者の権利保護を計るなどしていた納富の面目躍如といったところだ。

さらに第4項では「(前略) 教員ト生徒トヲ論セズ其ノ消費物ノ代価ヲ引去リ残額三分ノ二ハ其ノ発明人ニ与フヘシ」と次の第4章「出品並注文引受」の中で示されている、博物館や品評会等へ出品した作品が売れた場合と同様、制作者個人の収入となることを保証しているのである。教育の成果が即地域社会へ還元されるよう心を砕いているわけだが、教官と生徒が一体となって作品造りに励んでいる様子が目に浮かぶようであり、これらの規約自体今日のデザイン系大学のそれと比しても先進であったといえるだろう。

納富自身は病弱であったことと、地元議会の理解が得られず苦労を重ねた結果、体調を崩し、教務長から囑託教授まで格下げとなって遂に帰京してしまうため、在任期間は短かったが、このように優れたしかもきめ細かい規定がつくられていたことによ

り、彼が蒔いた種は確実に芽を出し、次第に根を張ってゆくのである。開校式で生徒を代表して祝辞を読んだ島田佳矣は明治22年東京美術学校開校と共に同校へ進学しやがて美術学校教授を務めるに至るし、納富の没後10年にして設立される仙台の国立工芸指導所初代所長はやはり教え子の国井喜太郎（富山県工芸学校卒）であるなど、日本の美術・工芸界に彼の薫陶を受けて輩出した人材は極めて多い。しかし、当初の卒業生数に見るように、それは当時はまだ成果となつては見えなかったのだ。教育とはすぐに効果の出ないものなのだ、とは今日振り返ればこそいえるが、苦難の時代であった。

金沢工業学校のカリキュラム

同校のカリキュラムを概観してみよう。

専門画学部を例にとると、読書、作文、幾何、遠近法、動植物学、考古学、講話、古今画模写、写生、実業、韻事、器物上応用、習字の13教科があり、これらを第1期から第5期に分けて取り合わせ、各期とも毎週40.5時間割り付けられている。

専門画学部といえども幾何や動植物学、考古学が取り入れられており、美術工芸部には物理、化学、算術と経済、簿記が加わっている。普通工芸部に至ってはこれにさらに機械学が加わる。単なる技術だけを教えようとしたものでなく、科学的な知識と共に全人的な教養人を目指しているのは明らかだ。（付表1-1～1-3参照）

しかしいかに見聞はひろしといえど、近代的学校教育というものを経験していない納富が一人で考えたものとは考えられず、やはりワグネル（後述）等の助言を得たものと考えられる。（ちなみに明治22年に開校した東京美術学校の普通科教科の中にやはり理科及び数学が入っており、教育機関が整備されていなかった当時は必要な教養であったのかもしれない。また23年に改訂された規則では美術工芸科には冶金法や応用化学が取り入れられているが、鋳物や漆材料の調整に必要と考えたものであろう）。

表中、実業というのは実技の授業であろうが、今日でいえば工業デザインや建築設計などを学外から

研究委託されて、研究室を上げて取り組むような事例に当たると考えられる。

今日の課題制作が通常モデルやパネルでのプレゼンテーションで終わるのは異なり、あくまで実物を造っていたようだ。先に紹介した付則の第4章「出品並注文引受」の第3項には「生徒実業便利ノタメ衆庶ノ注文ヲ引受ケ期日ヲ約シテ其需メニ応スル事アルヘシ」とあるのがそれを証している。もちろんそれらは「相当の代価を付して売却され」たのである。ちなみに其の収益だが、第4項には「(前略) 収入金ハ経費ヲ引キ去リ残余金三分ノ二ハ其製品者ニ下付スヘシ」とある。

校名の謎

ところで、この学校の内容が美術工芸にほとんど偏っているのに工業学校としたのはなぜであろうか。

これは当時工芸も工業もまだそれほど違いがなかったためでもある。工は「たくみ」でありもの造りは全て工であった。百工とはもの造り全般をさす言葉であったように、それを業とするのが工業であるわけで、今日のような近代工業は日本には未だ存在しなかったもので、一般にもそれほど明確に使い分けられていたわけではない。ただ業には道具機械を使って造る意があり、納富はフィラデルフィア博の報告においても、我が国の製品は優れているが名人芸的なものが多く、大量に注文を受けても造れない、という事を心配しているところから、名人芸的なひびきのする芸を避けたのではあるまいか。さらにはドイツ人ゴットフリート・ワグネルの影響も大きいと思われる。ワグネルは1852年ゲッチンゲン大学において博士号を受けた後フランスにおいて数学・自然科学を研究した科学者であった。しかし多才な人物であったことから明治政府に認められ東京開成学校・文部省制作学校・京都医学校・東京大学等で理化学及び応用化学を講じ、5年には納富が派遣されたウィーン博の顧問を務めた。彼は工業の未発達な日本においては、優れた美術工芸品を出品するほうが日本を世界に認識させることができると考えたが、しかし製造技術は進歩した西欧の技術を移入すべき

と考えていた。このため、ウィーン博の審査官として渡欧した納富をして、その後エルボーゲンの製陶所などで学ばせることに尽力したのである。

納富は若い日に長州萩や長崎で画業を学んでおり、得意は絵画と、欧州の製陶所で学んだ製陶技術であった。教育の中心は工業というよりは美術・工芸に近いものであったろう。愛弟子の島田が卒業を待たずして東京美術学校へ進学しているように、多くの生徒の目標もまた美術であり、美術工芸であった。

卒業生名簿(注2)から大正元年～5年の進路を拾い上げてみると、卒業生総数171名中25名(15%)もが東京美術学校(以後美校)へ進学している。最も多い大正4年卒の場合32名中の9名が同校へ進んでいる。ただ同5年になると早稲田大学の理工科へ進んだものが美校進学者と同数の3名となっているのが注目されるほか、東京高等工業学校窯業科へも1名進学している。このころようやく工業学校らしくなったといえようか。

納富の造った学校はその後高岡、高松と続くのだがそれらは工芸学校となっている。これは両校とも時の徳久恒範知事が招いたものだが、既に校名は決まっていたと考えられること、工芸の中には工業の意がふくまれているとする考えが強まっていたか、とも考えられるが定かではない。金沢の場合は納富の強い意志で名前は工業となったのであったが、実際には工芸あるいはそれ以上に美術工芸学校であったといえよう。

なお高岡工芸の90年史には「国井校長就任の覚悟」とのタイトルで昭和14年1月31日に蔵前工業会館で開かれた「納富先生追悼座談会」での国井喜太郎(第5代富山県率工芸校長)の発言を載せているが、この中に納富の考える工業ないし工芸と言うものを表わしていると考えられる次のようなくだりがある。「(前略)私の最も尊敬しておった納富先生が築き上げた、日本に一つしかない立派な工芸学校がこの頃工芸学校でなくなりかかっている、段々腐りかかっている。あの形から見ると誰が見てもああいうものは継続する必要がないという形になっている。やがてあの学校が廃止になって近代工業の学校がで

きかかっている。私共は卒業生としてまた納富先生の精神を受け継いでいる者にとってどうして傍観(注3)していただけるか。」とあって、これは納富の学校が近代工業一辺倒の工業学校とは一線を画したものであったことを示している。

校友会図案部

納富の考え方の反映と見られる事例は生徒と教職員の連帯組織であった校友会の活動ぶりからもうかがい知ることができる。そもそも校友会の母体となったのは図案部であるとされる。その創設は明らかではないが、明治30年頃久保田米僊(注4)が中心となって造った図案研究会が始めらしい。創設期の学校規則、特に付則の中に示された納富の産業界への強い意志が受け継がれたものであろう。

図案部規則によれば毎年2、6、9、11月の4回例会と称して、課題を決めて図案のコンペティションを行い、賞杯や褒状を与えている。例会は大正7年2月で第78回を数えているが、その最盛期は明治43～45年頃であったとされる。審査結果は図案絵画科が多くの特賞をとったが他の三科も負けてはいなかったらしい。審査も活気があったようだ。

図案部の活動はその後同校の活動の中心をなした。

校名の変遷

ここまで見てくると、設立以来変わらない「工業学校」の名称は果たして妥当なのかとの疑問が湧いてくる。

同校の歴史を繙いてみると常に校名を変えるべきかどうかの議論がおこなわれている。最も多くでたのは工芸学校であったと思われる。田辺校長時代(昭和14～17年)にもそのようなことが諮問員に提出されたが、納富以来の校名はみだりに変えるべきではないというので退けられたという。別に、後の金沢美大のような工芸の専門学校に昇格させる運動もあったらしい。しかし、石川県工業学校が石川県立工業学校と改名(明治34年)されて以降「工業」が変わることはなかった。

さらに昭和12（1937）年には科の改称が行われ図案絵画科は単に図案科となる。ここに、ついに絵画は表舞台から姿を消す。科の改称は当然教科課程の改訂を伴っていたので、絵画は基礎美術の範囲にとどめられることとなったのである。

第1次大戦前後の産業発展に端を発した我が国の重工業化は実業学校令の改正を誘い、大正10年には工業学校規定も改訂された。世は次第に軍需生産へと傾きつつあった。

昭和13年、老朽化した校舎改築のため県に出された陳情書の一節を見てみよう。

「(前略) 由来我が県立工業学校ハ本邦美術工芸界ニ人材ヲ送ルコト五十年、今ヤ古今未曾有ノ非常時ニ際会シテハ特ニ時局即応ニ努メ其ノ卒業生ノ過半ヲ戦時工業ニ送り国策ニ貢献シツツアルハ規定ノ事実ニシテ (後略)」これではまるで工業学校というのは隠れみのであって、本当は美術工芸学校であったのだと公言しているようなものである。この点、東京美術学校卒である太田誠二校長の方が、むしろ冷静に次のように述べている。「(前略) 独り本校ノミ五十年の伝統ヲ株守シテ時代ニ即応セザリシ為、志願者人数・質共ニ逐年低下シ機織科ヲ除イテハ殆ド県下ニ於ケル三流・四流ノ (中略)。只現下軍需工業ノ勃興セルト本年ヨリ応用化学科ヲ新設セルトニ依リテ県下稀ニ見ル多数ノ応募者ヲ得タルモ恐ラク是レ永続的ノ現象ニ在ラザルベシ。顧フニ本校設置ノ諸科ハ主トシテ鎖国・封建ノ時代ニ発達シタル工業ニシテ、世界ト交易シ大衆ヲ対象トスル現代工業トハ相容レザル点頗ル多ク、従テ需要者ヲ増加シ産額ヲ激増セシムルコト能ハザルナリ。(後略)」そして一案として、これまでの窯業科、塗工科、図案科、木工科をまとめて工芸部と成し、機織科と色染科はまとめて紡織部に、最後に応用化学科と、新規に時流にあった新工業科(x)を加え工業部として新発足する案を提示している。

ちなみに富山県工芸学校では既に昭和4年に工芸4科を総括して工芸部とし、応用科学・機械電気の2科を一括して工業部としているが、太田にとって母校である同校の改革は当然承知していたと思われ

る。

そして第2案としては、上記の改組案が不可能ならばいっそ新しい工業学校を起こすべしと説いている。しかしこれは県議会を動かすには至らなかった。

なおこの新工業科の一例として精密機械科が本県民性に即して将来性を有するのではないかと文中述べているが、含蓄ある指摘というべきであろう。

太田校長は任期わずか4年にして静岡県工業試験場長へと転出したが、戦後は金沢美大の専任講師に迎えられ活躍した。

第二次大戦後、校名は3度に渡って改称される。

すなわち昭和22年に行われた6・3・3制など一連の教育制度の改革に伴って、翌23年4月「石川県立金沢工芸高等学校」となったのが最初で、これは翌24年には金沢がとれ「石川県立工芸高等学校」と改称されるのである。長年望んでも果せなかった工芸の名が、戦後の平和・文化への流れを受けて一転して命名されたのであった。

これはやがて昭和33年に「石川県立工業高等学校」と再び改称されるのだが、その前年の32年、つまり工芸高等学校時代の最終年に同校は創立70周年を迎えた。

70周年に際し、同校は北国新聞社より「北国文化賞」を受賞するのだが、受賞に先立つ数日前の同紙社説は地域における同校の認識のされ方がどのようなものであったのかを如実に表現している。以下に全文を紹介する。

「北国文化賞の受賞に寄せて われわれは、ことしの受賞団体に「石川県立工芸高等学校」の名をみることができた。従来の受賞団体に比べて、やや異色の対象である。同校はきたる11月6日に開校70周年を迎えるという日本最古の「工業学校」である。この間、当地方の美術、工芸、産業界の発展におよぼした影響はじつに大きく、人材は雲のごとく輩出して日本の美術工芸界に活躍し、産業界に貢献した。「工芸石川」という名を築き上げた素地は同校にあり、同校に教え学んだ多くの人々の“伝統”の力は、高く評価されていいはずだ。われわれは同校に、かつ現在学んでいる若き世代の未来にかけて「北国文化

賞」を贈ることをよろこびとする。」

上記文中「工業学校」だけが奇異な感がするのは筆者だけではあるまい。これが「美術工芸学校」であっても「美術学校」であっても、それほど不思議はない。いやむしろそのほうが適切な感じがするはずである。工業学校はこの地域では美術工芸学校とながらく同義であったのだといえる。

このように、名前は「工業学校」で実態は「美術工芸学校」という日本最古の産業デザイン教育校は、その先進性ゆえに社会の変動と共に数奇の運命をたどったわけだが、その役割は戦後に金沢美術工芸専門学校ができるまでつづいたのである。

なお、この年11月6日に举行された創立70周年記念式典には来賓として金沢美術工芸大学学長が祝辞を述べている。

残念ながらその内容を知ることは出来ないが、悲願であった美術工芸大学が同校卒業生らの尽力によって可能になった旨を述べ、同校との浅からぬ因縁と連帯感を表明したものではなかったろうか。

しかし翌33年には工芸に改称後9年にして「石川県立工業高等学校」と逆改称され今日に及んでいる。

工芸が再び工業となった背景には、工業化社会が急成長を遂げ、戦後の復興著しい世相があった。戦後の21年に生徒募集を復活した図案科はこの時点で「産業意匠科」と改称されるのである。今日のインダストリアル・デザインとしての位置づけがなされたものであろう。

美術工芸学校としての最発展期は青木外吉校長時代の正13年木工科を増設した頃と見ることが出来る。なお明治27年、絵画・彫刻・描金・髹漆・染織と女子手芸部の6科1部とした学則及び明治31年の図案絵画・陶磁・漆工・染織・金工（金工は当分欠くとあるがついに出来なかった）の4科設置に伴う改正学則は、このころ設置された全国の古い工業学校校則の模範となったものという。

大正11年には創立者納富介次郎の胸像除幕式が行われているが、このときの学科は大正9年に染織が機織科と色染科に分離独立したため5科となっていた。先に述べた木工科がその後加わり、これ以降、

山脇雄吉校長が勇退する昭和10年頃まで6科目となった工芸路線は安定発展していた。

ところで、戦中途絶えていた図案科生徒の募集が復活されるのは、終戦の翌年の事だが、この昭和21年は別な意味で重要な年であった。「金沢美術工芸専門学校」（金沢美専・現金沢美術工芸大学）がこの年7月文部省の認可を受け、9月には入学式を挙行することになったからである。これこそが美術工芸の好きな金沢市民が、明治以来待ち望んだ美術学校であった。

昭和22年7月、工業学校は創立60周年を迎え、記念行事の一環として初代納富校長の作品を始め歴代教授、諸先輩の作品をあつめ懐古遺作展覧会を行なったが、学校が意気込んだ割には参観者は少なかったようだ。戦争が終り、市民の目は金沢らしい文化的な施設としては、もはや県立工業ではなく金沢美専へと移ってしまっていたのだ。皮肉なことに新制高等学校として「金沢工芸高等学校」と改称発足した翌昭和23年には、金沢美専は美術工芸学校として日本にはばたくべく既に苦難の大海へと漕ぎ出していたのである。

以上、金沢工業学校を通して産業デザイン教育の歩みを見てきたが、同校の美術工芸学校としての役割はここに終わったといえる。

金沢美術工芸専門学校

ここまで、日本最初の産業デザイン教育校としての県立工業を語ってきたが、皮肉なことに最後は金沢美専の話で閉じることになってしまった。しかし、これは同校の輝かしい歴史に対する評価が下がったということでは決してない。日本全体の教育制度の変革という、選択肢のない、いかんともし難い役割の転換があったからである。しかし同校の場合はその老木の大根元から金沢美専という若木を生んだ分だけ、他の同種学校よりも幸せであるともいえるのではあるまいか。今日では同校のデザイン教育はその大半が金沢美大の出身者によって行われているのである。

金沢美専における産業デザイン教育のあゆみは、

「産業美術学科の成立と進展」(後編)で詳しく紹介するが、ここでその両校の人的なつながりを見てみよう。金沢美専の設立に多大の尽力をしたのは浅田二郎(県工同窓会長)長谷川八十吉らの石川県美術文化協会のメンバーであったが、特に金沢市が新設した文化部の嘱託職員として活動した浅田・長谷川の努力は大変なものであったようだ。共に工業学校図案絵画科から東京美術学校への進学者である。

この外矩幸成(窯業科卒・彫塑)高光一也(図案絵画卒・文化功労者)やや時代が下って大場勝雄(図案絵画科卒・人間国宝)北出藤雄(同・現金沢美大 学長)松村数雄(同、工業デザイン)らも金沢美大 教授として活躍したが、ほかにも金沢美大教員の工業学校出身者は少なくない。

なお、納富が北陸地区に作ったもう一つの実業学校である富山県工芸学校(現高岡工芸高等学校)出身で金沢美大教員となったものに、太田誠二(漆・塗装)、南部勝之進(金工)、米田豊也(金工)らがいる。

蛇足になるが、東京芸術大学でデザイン科の教授を務め美術学部長をも務めた小池岩太郎(故人)はやはり納富の作った高松工芸高校の出身であるが、筆者黒川はその教え子でもあることを付け加えさせていたきたい。

おわりに

本稿で引用した文献の出典は特に注記などで記載したもの以外、多くが石川県立工業高等学校の100年史からであることを記し感謝の意を表したい。

なお、本研究は平成6年度本学共同研究費にかかる研究であり、黒川威人と山岸政雄および川本敦久の共同研究になるものである。ただし本稿は、山岸、川本の協力を得つつも黒川が単独で執筆したものであり、文責を明確にするため共同研究者はオーサーとしては掲載しなかった。

注

注1 「納富介次郎略伝」井出誠次郎 1976 p55

注2 参考文献13巻末

注3 参考文献3、p36

注4 米遷は明治30～31年図案絵画科で教鞭をとったが、東京では納富および鈴木華邨、荒木探令らと図案調整所を設立したことでも知られている。

参考文献

1. 県工百年史 高堀勝喜監修 石川県立工業高等学校創立百周年記念実行委員会 1987
2. 納富介次郎先生銅像建設記念帖 富山県立工芸学校内納富先生銅像建設委員 1934
3. 富山県立高岡工芸高等学校 創立九十年史 1984
4. 同窓生名簿 東京美術学校、東京芸術大学美術学部、東京芸術大学大学院美術研究科 同窓生名簿編集委員会 昭和47年版
5. 富山県漆工総覧 富山県工業試験場 1971
6. 東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第1巻 1987 同第2巻 1992
7. 近代日本の産業デザイン思想 柏木博 1979
8. 明治前期産業発達史資料第2集(2) 襖国博覧会 参同紀要 1897
9. 金沢の近代工芸史研究 金沢美術工芸大学美術工芸研究所 1995
10. 百年史 京都市立芸術大学 京都市立芸術大学百年史 編纂委員会 1981
11. 金沢美術工芸大学50年史 50年史編纂委員会 1996
12. 礎 香川県立高松工芸高等学校創立90周年記念誌 1988
13. 校友会誌 石川県立工業学校校友会 1916
14. 稿本金沢市史 学事編 第四 1922

付 表

表1～2は参考文献14を参照しつつも見易さの点から参考文献1のものを転載させていただいた。

表 1 明治 20 年代教科課程表

表 1 - 1 専門画学部部学大修科

科目	期	第 1 期	毎週時限	第 2 期	毎週時限	第 3 期	毎週時限	第 4 期	毎週時限	第 5 期	毎週時限
読書		漢文交 仮名文	6	同上	6	和文漢文	6	同上	6	同上	3
作文		漢文交 往復文 記記事	4	同上	4	記記事	3	同上 和漢文	2		
幾何		幾何図	2								
遠近法		遠近法	2								
動植物学		植物大意	2	動物大意	2						
考古学								有職古実 鑑定	2	同上	2
講話		講話	4.5	同上	4.5	同上	4.5	同上	4.5	同上	4.5
古今画模写		模写	7	同上	7	同上	5				
写生		植物写生	7	魚鳥虫 写生	7	人物写生	7	獸類写生	5	真景写生	5
実業				実業	4	同上	12	同上	12	同上	15
韻時				和歌詩 ノ種大意	3	同上	3	同上	3	同上	5
器物上応用								応用	6	同上	6
習字		習字	6	同上	3						
合計		9 課	40.5	9 課	40.5	7 課	40.5	8 課	40.5	7 課	40.5

表 1 - 2 美術工芸部部学大修科

科目	期	第 1 期	毎週時限	第 2 期	毎週時限	第 3 期	毎週時限	第 4 期	毎週時限	第 5 期	毎週時限
読書		漢文交 仮名文	6	漢文	6	和漢文 文	3	同上	3		
作文		漢文交 往復文 記記事	1	同上	1	同上	1				
物理		物理	3	同上	3						
化学		無機化 学大意	2	有機化 学大意	2	応用化 学大意	2				
算術		諸比例	2								
幾何		幾何図	3								
経済				経済大意	2						
簿記						簿記	3				
図画		画	12	同上	10	同上	10	図	9	同上	9
考古学										古実 有職 鑑定	6
韻事						和歌詩 ノ種大意	2	同 意	6	同上	6
講話		講話	4.5	同上	4.5	同上	4.5	同上	4.5	同上	4.5
実業		実業	10	同上	15	同上	18	同上	18	同上	15
新事実験								実験	3	同上	3
合計		9 課	43.5	8 課	43.5	8 課	43.5	6 課	43.5	6 課	43.5

表 1 - 3 普通工芸部部学大修科

科目	期	第 1 期	每週時限	第 2 期	每週時限	第 3 期	每週時限	第 4 期	每週時限	第 5 期	每週時限
読書		仮名交	6	漢文	6	和漢文	3				
作文		往復文近易ノ記事	1	同上	1	同上	1				
物理		物理	3	物理	3	物理	3				
化学		無機化学	2	有機化学	3	応用化学	3	同上	6	同上	6
算術		諸比例	2	平方根ノ積	1						
幾何		幾何	3	同上	2	同上	2				
經濟				經濟大意	2						
簿記						簿記	3				
図画		画	6	同上	6	図	6	同上	3	同上	3
機械学								機械学大意	6	同上	6
分析								属科分析	6	同上	6
講話		講話	4.5	同上	4.5	同上	4.5	同上	4.5	同上	4.5
実業		実業	18	同上	18	同上	18	同上	15	同上	15
新事実験						実験	3	同上	6	同上	6
合計		9 課	46.5	10 課	46.5	10 課	46.5	7 課	46.5	7 課	46.5

表 2 各科在学生生徒一覽

部学	部 科名	分目	在籍生徒(出席生徒)					
			部学大修	部学小修	分学大修	分学小修	研究生	計
美術工芸部	蠟粘土模型科	男女			1 (1)			1 (1)
		男女	1 (1)				1 (1)	2 (2)
	染画科	男女	14 (14)		12 (11)		18 (10)	44 (35)
		男女	1 (1)					1 (1)
	木石牙彫刻科	男女		1				1 (1)
男女		13 (13)	1	8 (8)		17 (15)	39 (36)	
普通工芸部	色染科	男女	10 (12)	1			2 (2)	13 (14)
		男女					1 (1)	1 (1)
	鑄銅科	男女					2 (2)	10 (8)
		男女	8 (6)					
	海産製造科	男女	1 (1)	1 (2)	6 (5)	2 (2)		10 (10)
男女		4 (4)	4 (3)	17 (17)	5 (5)	18 (16)	48 (45)	
髹漆科	男女					2 (2)	2 (2)	
	男女	1 (1)					1 (1)	
専門画学部	本邦歴史科	男女	1 (1)					1 (1)
		男女	5 (5)				8	13 (5)
	写真植物科	男女	1 (1)		2	1 (1)		4 (2)
		男女	1 (1)	2	(1)	1 (1)		4 (3)
	写真動物科	男女	4 (4)					4 (4)
男女		4 (4)		3 (3)			7 (7)	
写意人物科	男女	50 (50)	5 (2)	22 (22)	3 (3)	32 (16)	112 (93)	
	男女	19 (19)	5 (3)	27 (27)	6 (6)	37 (33)	94 (88)	
合計			69 (69)	10 (5)	49 (49)	9 (9)	69 (49)	206 (181)